

【教育報告】

レポート課題におけるセルフチェックシートの効果に関する報告 —心理学実験レポートを対象として—

足 立 耕 平

The Effect of Self-check Sheets on Writing a Psychology Lab Report

Kohei ADACHI

要 約

心理学実験のレポート課題で導入したセルフチェックシートの使用状況について報告するとともに、セルフチェックシートの使用状況によってレポート内容に改善がみられるか検討を行った。レポートを課す際に、「今回の実験の目的・仮説が書いてある」、「誤字・脱字がないか確認をした」などの27項目からなるセルフチェックシートを配布し、全項目にチェックをした後にレポートに添付し提出するよう求めた。分析対象とした94名分のレポートのうち全ての項目にチェックがあり使用に不備のなかったレポートは71本であり、残りの23本はチェックの入っていない項目がある、チェックリストが添付されていないといった不備があった。不備のないレポートは不備のあるレポートよりも各項目に関する記載ミスが有意に少なく、セルフチェックシートの適切な使用によりレポート内容が改善することが示された。今後はセルフチェックシートの適切な使用を促す取り組みを考えていく必要がある。

キーワード：セルフチェックシート、レポート作成、心理学実験

1. 背景と目的

大学教育においてはレポートや小論文、卒業論文など一定量のまとまった文章を書くことが求められる。このため初年次においてレポートや小論文の書き方を教育することが重要であり、本学においても文献講読や日本語表現に関する科目を初年次の必修科目として位置づけている。

ところで、論文全体の構成や文献の引用の仕方、注釈や参考文献の書き方は学問分野によって異なっている。心理学領域においてはアメリカ心理学会が「APA 論文作成マニュアル」を作成しており（American Psychological Association, 2010前田・江藤・田中訳2011）、国際的にはこのマニュアルが参照されている。このマニュアルでは論文の構成の仕方、図表の作成方法、文献の引用方法、数や単位の表し方、大文字やイタリック、省略形の使用法など細部にわたりルー

ルが定められている。本邦においては日本心理学会が「心理学研究 執筆の手引き」（日本心理学会，2015）を作成しており、同様に図表の作成方法や文献の引用方法、数や単位の表し方など論文作成に関するルールが掲載されている。

以上のように、心理学では論文の執筆に際して独自のルールがあり、本学では初年次の心理学実験の授業から心理学のルールに従ったレポートの作成を指導してきている。しかし、初年次生の多くはレポートの作成に不慣れであり、内容面のみならず形式的な面でも多くの誤りが認められる。誤りが多くなるほど添削に労力と時間を要することになるため、当然ではあるが、提出されたレポートに誤りは少ない方が望ましい。特に文献の引用の仕方や図表の描き方などの形式的な側面での誤りは、ルールに従えば良いため自己修正がしやすい点であろう。このため、2011年度からセルフチェックシートを用いて事前に自己点検をした後にレポートを提出させる取り組みを開始した。この際、セルフチェックシートもレポート本文に添付して提出するよう求めた。

レポート提出時にチェックシートを用いて学生に自己点検を求める試みはこれまでも報告されてきている（森，1998；山本，2013；二階堂・守山，2014）。二階堂・守山（2014）では小論文提出の際に、必ずチェックシートも提出させ、チェック項目に1つでも違反（例 誤字・脱字）がある場合には全体の評価を不合格にするという取り組みを行っている。その結果、学生は注意して小論文を書くようになったと述べられている。ただし、チェックシートの導入により小論文の内容そのものがどのように変化したかについては触れられていない。山本（2013）ではレポート本文の提出と同時に「レポート提出チェックシート」を提出させている。このチェックシートでは、採点対象となるために必ず従うべき指示として12項目（対象とした本を本当に通読したか、他人が書いたものの丸写し・盗作・剽窃ではないか）が設けられており、1か所でも指示に従っていない場合は採点対象とならず失格となることとされている。また、採点表として12項目（参考文献一覧の記載は適切であるか：5点、誤字・脱字はないか：1か所につき－1点、など合計50点満点）が設けられている。採点表は学生が提出前に自己採点する欄と、提出後に教員が正式な採点を記入する欄がある。このチェックシートの効果に関して山本（2013）は、失格となった学生が多数いたことや50点満点中30点以上だった学生が少数だったことなどから、多くの学生が機械的にチェックを入れ、教員の意図を考えるとなく自己採点を行っていたと述べている。

以上のようにレポート提出時にチェックシートを用いて学生に自己点検を求める試みが行われてきているものの、その具体的な効果については明らかにされていない。山本（2013）が指摘しているように、チェック項目の指示に従ってレポートを作成・修正することをせずに機械的にチェックを入れ本文を提出するという事態も報告されている。筆者の経験では、チェックシートは本文に添付されているものの全くチェックが入っていない場合や、そもそもチェックシートが添付されていない場合も散見される。チェックシートの効果を検討するためには、このようなチェックシートを適切に使用しない例を把握し、対策を考えることも有益であろう。そこで、本稿では筆者が心理学実験のレポート課題で導入したセルフチェックシートの使用状況について報告する。また、セルフチェックシートの使用状況によってレポート内容に改善がみれるか検討を

行う。

2. 心理学実験のレポート課題

セルフチェックシートに関する検討に先立ち、レポート課題について説明を行う。本稿で分析対象とするセルフチェックシートは本学人間心理学科の初年次開講科目であった心理学実験Ⅰ（基礎）での錯視に関するレポートで導入したものである。心理学実験Ⅰ（基礎）は通年科目であり筆者を含め3名の教員で担当をしていた。前期は輪講で行い、レポートを書く意義やレポートの書き方、研究倫理について講義を行っていた。また、学生が実験者役や実験参加者役を体験しながら3つのテーマで実験や調査を行い、レポートとしてまとめ提出することを課していた。後期は学生を大きく3つのグループに分け、教員3名でそれぞれのグループを4週間ずつ順に担当していく形式になっていた。学生はそれぞれの教員の下、4週間で2つのテーマについて実験・調査を行い、レポートを書くことが求められた。このため学生は後期を通して全部で6つのレポートを執筆することとなっていた。

本稿で対象とする錯視のレポートは後期に筆者が扱ったテーマのうちの一つである。なお、もう一つのテーマである生理反応の測定の実験でもセルフチェックシートを導入していた。しかし、錯視の実験は心理学実験に関する多くの書籍に掲載されており、より一般的な心理学実験のテーマであることから、本稿では錯視の実験でのセルフチェックシートを分析対象とした。

錯視の実験は、筆者が担当した1グループ4週間のうち前半の2週間で実施した（後半2週間は生理反応の測定の実験を行った）。錯視の実験はミュラーリヤーの錯視における斜辺の長さと角度が錯視量に及ぼす影響を検討するものであった。一週目に実験手順やデータのまとめかたを解説したレジュメを配布し、学生に2人一組となって実験者役と実験参加者役を交代しながらデータを収集し、提出するよう指示した。二週目はデータの集計結果を示し、レポートの書き方について解説を行いレポートの作成と提出を求めた。この際、セルフチェックシート（Figure 1）を配布し、各項目に従って自己点検をし、すべての項目にチェックが入るようにレポートを作成してからレポートに添付して提出するよう指示をした。また、レポートを作成する際は教科書として指定したFindlay（1993細江・細越訳2011）を参考にするよう教示した。レポートの提出締め切りは筆者が担当した講義の4週目から2週間後であった。

3. セルフチェックシートの使用状況

筆者が担当していた心理学実験Ⅰ（基礎）のレポート課題でのセルフチェックシートは2011年度から導入し、何度かの改訂を経て現在に至っている。本稿では最新版である2015年度、2016年度のセルフチェックシート（Figure 1）について検討を行った。

分析対象としたレポートは、2015年度は44名分、2016年度は50名分であった。レポート提出締

錯視の実験レポート 提出チェックリスト

次の各項目について OK であればチェックし、レポートの最後に一緒に綴じて提出をすること。

目的について

- ☐ 錯視とは何かについて説明をしてある。
- ☐ 日常で見られる錯視の例を書いてある。
- ☐ ミュラー・リヤーの錯視について、図を用いてどのようなものか説明をしてある。
- ☐ 今回の実験の目的・仮説が書いてある。

方法について

- ☐ 被験者の人数・性別および、年齢に関する平均と標準偏差が書いてある。
- ☐ 方法は過去形で書いてある。
- ☐ 実験で用いた刺激および刺激の提示順序の表には表の番号とタイトルが書いてある。
- ☐ 実験に用いたミュラー・リヤーの刺激について図の番号とタイトルが書いてある。

結果について

- ☐ 辺の長さの影響に関する表と図があり、それぞれに番号とタイトルが書いてある。
- ☐ 辺の角度の影響に関する表と図があり、それぞれに番号とタイトルが書いてある。
- ☐ 表のタイトルは表の上、図のタイトルは図の下に書いてある（目的・方法の図表についても同様）。
- ☐ 表は横線だけで縦線はいらない（方法の表についても同様）。
- ☐ 図の背景は白で補助線はいらない。また外枠もいらない。
- ☐ 図の X 軸、Y 軸の説明が書いてある。
- ☐ 本文中に「図○に～を示す」「表○に～を示す」もしくは「～を示す（図○）」「～を示す（表○）」など、図表と対応した記述がある。
- ☐ 図表からどのようなことが読み取れるかが書いてある。

考察について

- ☐ 考察の最初で実験の目的が簡単に説明されている。
- ☐ 結果について簡潔にまとめてある（結果の数値（平均値など）は用いない）。
- ☐ 仮説が支持されたかどうか書かれている。
- ☐ 斜辺の長さの結果について、なぜそのような結果になったのか考えが述べられている。
- ☐ 斜辺の角度の結果について、なぜそのような結果になったのか考えが述べられている。
- ☐ 今回の実験の問題点と今後の展開が述べられている。

文献

- ☐ 著者名・発行年・タイトル・出版社の順などといった正しい表記で書いてある。
- ☐ 著者名のアルファベット順に並べてある。
- ☐ 本文中に用いられている文献と一致している。
- ☐ 本文での文献の表記の仕方は適切である。「足立・岸本（1995）」によると～」「～という報告がある（足立・岸本, 1995）」など。

その他

- ☐ 誤字・脱字がないか確認をした。

Figure 1. セルフチェックシート

め切りを過ぎてはいたが、学期末の成績評価までに遅れて提出をしたレポートについてもこの数に含めている。なお、2016年度に錯視のレポートに誤って生理反応の測定実験のセルフチェックシートを添付していた学生が1名いた。この学生についてはレポート作成時に錯視のセルフチェックシートを使用した添付を誤ったのか、そもそもセルフチェックシートを使用しなかったのか定かではないため分析対象には含めなかった。

セルフチェックシートの使用状況について Table 1 に示す。合計94名分のレポートの中で、セルフチェックシートが添付されておりかつ全ての項目にチェックがあったものが71本あった。セルフチェックシートは添付がされていたものの一部の項目でチェックがなかったものが13本、全ての項目にチェックが入っていなかったものが3本であった。セルフチェックシートが添付されていないものが7本あった。なお、一部の項目でチェックがなかった13本について、チェック未記入の項目数は最小値1から最大値23までと差があり、平均は5.92、標準偏差は7.60であった。

4. セルフチェックシートの使用状況によってレポート内容に違いはあるか

セルフチェックシートの使用状況によってレポートの内容に違いがあるかどうかを検討した。まず筆者が94名分のレポートを読み、Figure 1 のチェックシートのそれぞれの項目について基準が満たされているかどうか確認を行った。基準に達していない項目を記載ミスとし、1名分のレポートごとに記載ミスの合計を求め記載ミス数とした。

次に、セルフチェックシートの使用状況について、添付あり・全てチェックありの71本を不備なしのレポート、添付あり・一部チェックなしの13本、添付あり・全てチェックなしの3本、添付なしの7本を合わせた23本を不備ありのレポートとした。この不備なしレポートと不備ありレポートとの記載ミス数の平均値を Figure 2 に示す。記載ミス数の平均値に差があるかどうか対応のない t 検定を行った結果、不備なしレポートの方が不備ありレポートよりも記載ミスの数が有意に少なかった ($t(92) = 6.23$, $p < .001$)。

次に、不備なしレポートと不備ありレポートとで、チェックシートの各項目の記載ミスの割合に差があるかどうか Fisher の直接検定を行った。結果を Table 2 に示す。その結果、27項中、

Table 1
セルフチェックシートの使用状況

チェックシートの使用状況	2015年度	2016年度	合計
不備なし			
添付あり・全てチェックあり	36	35	71
不備あり			
添付あり・一部チェックなし	3	10	13
添付あり・全てチェックなし	1	2	3
添付なし	4	3	7
合計	44	50	94

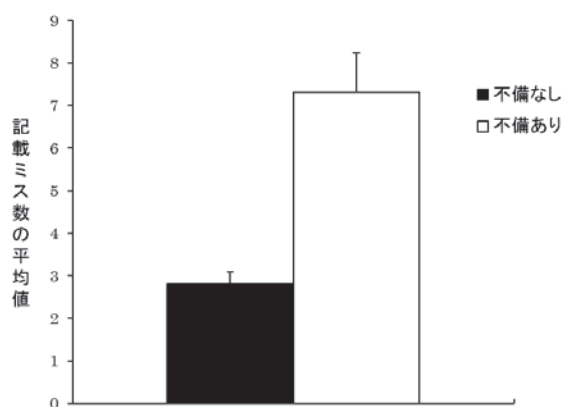


Figure 2. セルフチェックシートの使用状況による記載ミス数の平均値
(エラーバーは標準誤差)

Table 2
セルフチェックシートの使用状況による各項目の記載ミス数の割合

チェック項目	記載ミスの割合 (%)			Fisher
	不備なし	不備あり	差	
目的	錯視の説明	1.41	4.35	2.94
	日常での錯視の例	1.41	8.70	7.29
	ミュラーリヤーの図	18.31	39.13	20.82
	仮説	0.00	4.35	4.35
方法	被検者	2.82	4.35	1.53
	過去形	7.04	26.09	19.04
	提示順序	35.21	52.17	16.96
	刺激図	5.63	30.43	24.80
結果	長さの図表	1.41	26.09	24.68
	角度の図表	1.41	26.09	24.68
	タイトルの位置	12.68	34.78	22.11
	縦線不要	38.03	60.87	22.84
	補助線不要	23.94	60.87	36.93
	X Y 軸の説明	5.63	17.39	11.76
	図○、表○に	7.04	30.43	23.39
	結果の文章	1.41	4.35	2.94
考察	実験目的	0.00	0.00	0.00
	結果のまとめ	0.00	8.70	8.70
	仮説が支持されたか	0.00	4.35	4.35
	長さの考察	5.63	26.09	20.45
	角度の考察	5.63	26.09	20.45
	問題点	5.63	26.09	20.45
文献	文献の表記	16.90	21.74	4.84
	アルファベット順	28.17	60.87	32.70
	本文と一致	11.27	39.13	27.86
	本文での表記	16.90	52.17	35.27
その他	誤字脱字	28.17	34.78	6.61

13項目で不備なしレポートの方が不備ありレポートよりも記載ミスの割合が有意に少なかった。最も差がみられた項目は「図の背景は白で補助線はいらない。また外枠もいらない」であり、次に「本文での文献の表記の仕方は適切である」、「著者名のアルファベット順に並べてある」が続いていた。

5. 考 察

心理学実験のレポート課題で導入したセルフチェックシートの使用状況について報告し、セルフチェックシートの使用状況によってレポート内容に改善がみられるか検討を行った。

使用状況に関して、分析対象とした94本のレポートのうち71本では全ての項目にチェックが入ったセルフチェックシートがレポートに添付されていた。しかし、残りの23本については、セルフチェックシートは添付されているが項目にチェックがされていない、もしくはセルフチェックシート自体が添付されていなかった。

このようにセルフチェックシートの使用自体に不備のあるレポートが25%程度存在していた。セルフチェックシートの使用方法について講義中に説明をするだけでは不十分であり、なんらかの対策が必要である。対策としては、提出締め切り前にメールにてセルフチェックシートの適切な使用と添付について促す、セルフチェックシートの形式や色を目立つものに変更する、セルフチェックシートの使用に不備があった場合はレポートの評価を下げることを伝達するなどが考えられる。また、セルフチェックシートの使用に不備があった場合はレポートを受け取らず、修正した上で再提出を求めるという対応も考えられる。

次にセルフチェックシートの使用状況によってレポートの内容に違いがあるかどうかを検討した結果、不備なしレポートの方が不備ありレポートよりも記載ミスの数が有意に少なかった。セルフチェックシートの適切な使用によりレポート内容に改善が生じるといえる。不備なしレポートと不備ありレポートで特に差がみられた項目は図の作成方法に関する項目、文献の表記に関する項目であった。このような形式的な側面については、セルフチェックシートの効果が表れやすいといえる。

一方で不備なしレポートでも記載ミスの数が20%を超える項目が5項目存在していた。セルフチェックシートの項目にチェックが入っているにも関わらず、その項目の指示に従った適切な記載ができていない場合あるといえる。山本（2013）は、チェック項目の指示に従ってレポートを作成・修正することをせずに機械的にチェックを入れ本文を提出するという事態があったことを報告しているが、本研究においても同様の事態が生じていた可能性がある。また、「表は横線だけで縦線はいらない（方法の表についても同様）」の項目と「実験で用いた刺激および刺激の提示順序の表には表の番号とタイトルが書いてある」の項目は記載ミスの数が30%を超えていた。これらの項目ではチェックすべき箇所が複数含まれていたことやチェックすべき箇所が不明であったため記載ミスの誤りが多くなった可能性が考えられる。今後は各項目に含まれるチェック箇所

を1つにし、どこを確認すれば良いかわかりやすい表現に変更するなど、セルフチェックシートの改善も必要であろう。

最後に本研究の限界点と今後の展開について述べる。本研究ではセルフチェックシートに不備のないレポートは不備のあるレポートよりも記載ミス为数が少ないという結果が得られていた。しかし、これはセルフチェックシートの使用状況による差ではなく、レポート執筆に対する意欲や学力など他の要因によって生じている差である可能性がある。レポート執筆への意欲が少ない場合、記載ミスは多くなり、またセルフチェックシートの使用についても不適切になることが考えられる。レポート内容に対するセルフチェックシートの効果を検証するためには、セルフチェックシートを配布し使用を求める群とそのような教示を行わない群にランダムに学生を振り分け、提出されたレポートの内容を比較するといった検討が必要であろう。

本研究ではセルフチェックシートは筆者が作成し、学生へ配布してレポートの作成の際に自己点検をするよう指示をした。しかし、このような自己の適切な行動を促すためのチェックシートは本人自身が作成することが望ましいと筆者は考えている。社会人として自立して生活や仕事をしていく上では自己の行動の管理が重要となってくる。このような場面で他者からチェックシートを渡され活用するよう助言されることは多くはないであろう。このため自己の行動管理のためには自分自身でチェックシートを作成し、使用する力を身につけることが重要であると思われる。今後は学生とともにセルフチェックシートを開発する、学生にセルフチェックシートの改善を求めるといった取り組みを行い、自身でチェックシートを作成する力を養っていきたい。このような取り組みを行うことにより、チェックシートの活用が促され、チェックのし忘れやチェックシートが添付されていないといった不備も減少することが期待される。

文 献

American Psychological Association. (2010). Publication Manual of the American Psychological Association (Sixth Edition). Washington, D.C.: American Psychological Association.

(アメリカ心理学会 (APA) 前田 樹海・江藤 裕之・田中 建彦 (訳) (2011). APA 論文作成マニュアル 第2版 医学書院)

フィンドレイ, B. 細江 達郎・細越 久美子 (訳) (2011). 心理学実験・研究レポートの書き方ー学生のための初歩から卒論まで 北大路書房

日本心理学会 (2015). 心理学研究 執筆の手引き 金子書房

森 彰 (1998). 大学における教授法と教育システムの開発 (7)ーインターネットでの情報収集を活用した論文の作成手順ー 経営論集, 47, 213-227.

二階堂 整・守山 恵子 (2014). 福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み 福岡女学院大学紀要 人文学部編, 24, 105-121.

山本 英司 (2013). 通常講義科目におけるレポート作成指導ー「環境経済学」を事例としてー 奈良産業大学紀要, 30, 139-170.

(2018年10月3日 受理)